

家畜衛生だより 平成26年11月

紀北家畜保健衛生所

tel 073-462-0500

紀南家畜保健衛生所

tel 0739-47-0974

紀南家畜保健衛生所 東牟婁支所

tel 0735-58-1481

【肉用牛の腹づくり】

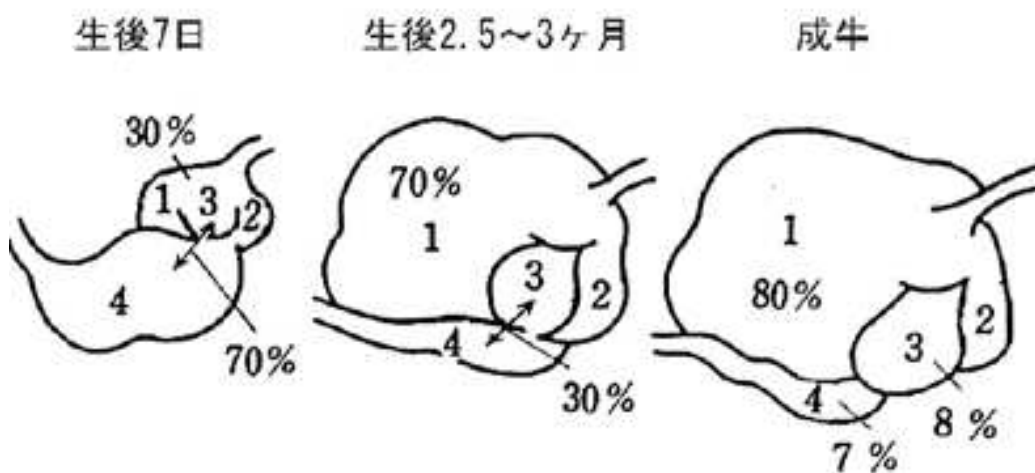
近年、円安、穀物の国際相場の上昇、原油高が続き、それに伴い飼料価格が高騰し、畜産経営を圧迫しています。和牛の繁殖経営においても生産費が上昇しているため、飼料給与を制限し、コスト削減の一助としたいところですが、これでは良質な子牛の生産は期待できません。このような時だからこそ良質な子牛の生産を目指し、降りかかる逆境を糧としていきたいものです。

良質な子牛は、腹づくりが最も肝心です。では、いい腹とはどのようなものでしょうか。いい腹とは、第一胃(ルーメン)がよく発達しているということです。今回、ルーメンの発育段階ならびにその機能についてお話します。

1. ルーメンの発育時期について

生後間もない子牛の第一胃はまだ小さく第三胃、第四胃が全体の80%を占めています。その後、2~3ヶ月齢で全体の約半分の領域を占めるようになり、成牛では約80%を占めるようになります。

単に大きいだけでなく、筋肉や表面組織がしっかりしたルーメンにすることが大切です。



2. ルーメンの役割(機能)について

牛が採取した飼料は、ルーメン内の微生物により分解・発酵され、VFA(揮発性脂肪酸)という物質に変わります。VFAは、主に酢酸、プロピオン酸、酪酸からなり、生体の発育や維持に利用されています。

ルーメンの容積が大きくなれば、より多くの飼料が摂取可能となり、筋肉が発達すれば飼料をよく攪拌することができ、表面組織の発達によりVFAの吸収効率がよくなり、より増体のよい子牛の生産が可能となります。

3. しっかりとした腹づくりについて

ルーメンが発育するのは、3ヶ月齢～12ヶ月齢で、中でも最もよく成長するのは8ヶ月齢だと言われています。よって、8ヶ月齢を中心に腹づくりを行うのが最も理に適っています。この時期は、粗飼料を中心に給餌するよう心がけましょう。粗飼料は分解され栄養として利用されるだけでなく、その繊維がルーメンを刺激し、ルーメンの容積や筋肉、表面組織の発達を促します。しかし、粗飼料であれば何でもいいというものではありません。例えば、小麦のような表面がつやつやしたものは微生物の付着が悪いので、消化されるのが遅く、刺激にはなりますが摂取量が増えません。このような例だけでなく、その長さ、硬さがルーメンの発達を促す刺激の過多に多く関係します。表面がつややかのものは、表面を傷つけたり、押しつぶして内部を露出さすなどの処理を行って下さい。また、長すぎず短すぎず、硬すぎず柔らかすぎないものを選び給餌するようにして下さい。さらにそれらに加え、個体ごとの嗜好性を十分に把握する必要があり、濃厚飼料との組み合わせや、給餌回数、単飼や群飼などの飼養形態の違いについても十分考慮するようにして下さい。

このような基本を念頭に、個体ごとの成長を十分把握しながら吟味し、よりよい子牛の生産を心がけるようにしましょう。

簡単に腹づくりといっても諸条件により創意工夫が必要です。このような時だからこそ、いままで培った経験と技術を活かし、よりよい子牛生産に取り組んでください。

気になることや不明な点がありましたら、最寄りの家畜保健衛生所までご相談ください。